

「古いものは悪いとはいえない」

「古いものは悪い、新しいものはいい」という考え方が、一時当たり前になっていました。しかし、そんな考え方も近年ようやく見直されてきています。古民家を再生する動きなどはそのよい例です。木造造りは鉄筋コンクリート造りより弱いといわれています。確かにそうなのですが、木造造りでも千年も持ち堪えている建物があります。そうです、法隆寺です。メンテナンスをきちんと施せばまだ大丈夫でしょう。このように、古いからといって一概に悪いとは言えないのです。これは私たち人間についても同じことです。年を取るということは決して悪ではないのです。

仏教童話の中に『おじいさまの知恵』という話があります。簡単に言いますと、昔インドに年寄りを捨てる国がありました。その王は、「年寄り自分では何もできなくせに口うるさい。顔はしわだらけで歯が抜け、腰も曲がり見苦しい。」と嫌い、年寄りを役に立たないものとして国から追い出してしまったのです。大臣たちは反対しますが聞く耳を持ちません。そんなある夜、天の神が王の枕元に立ち、神の出す問いに答えられなければ国を滅ぼすと言うのです。一頭の大きな白像を出した神は、「この白像は大きくてはかりにかけられない。この像の重さを量るにはどうしたらよいか。」と尋ねました。

皆さんは、分かりますか？

いくら考えても分かりません。困った王は、一日猶予をもらい、大臣たちに相談しますが誰も分かりません。すると一人の若い大臣が家へ帰ってよく考え、夕方までには返事をすると申し出ます。家へ帰った若い大臣は、地下室に隠していたおじいさんに相談します。おじいさんは、「そんなことならわけはないよ。大きな舟に像を乗せ、水に浮かべる。その舟が重みで沈んだところにしるしをつけ、今度はそのしるしだけ石を積み込んで、その石の重さを一つずつ量り、足せばいい。」と教えてくれました。城へ帰った大臣から答えを聞いた王は、夜、天の神に得意に答えました。物語では、他にこのような問いが二つあります。神は、王を褒め、「この国には賢い人間がいる。賢いものは大切にせよ。」と言います。喜んだ王は、この国を救ってくれたとして、若い大臣を呼び褒美をやるとうします。しかし大臣から、賢いのは自分ではなく父親だ、と告白されます。自分が悪かったと悟った王は、心を入れ替え、年寄りを大切にし、親孝行をするように方針を転換しました。おかげでこの国は、よい国になり、年寄りを大切にする国になりました。

この話のように、お年寄りにはこれまで生きてきたうえでの知恵があります。その知恵を継承することは、私たち人間にとって大切なことだと考えます。「古いものはだめ」と短絡的に決め付けしないで、古くてもよいものを大切にし、継承していけるようにしたいものです。それがこれから百年、地球を支える力の一つになるのではないのでしょうか。